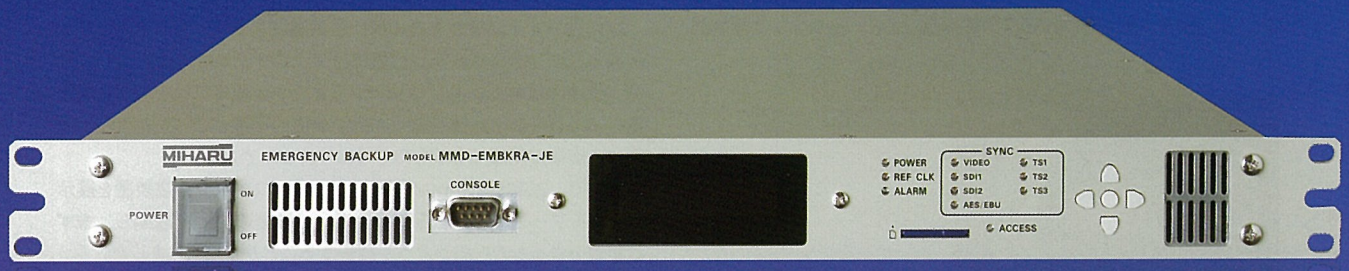
災害時だけでなく平時機能も充実

震災後に放送局の引き合い急増

東日本大震災後、ミハル通信の「放送局向け緊急バックアップシステム」が全国のキー局、ローカル局に注目されている。同製品は低価格でありながら、災害時に使用不能となったマスター設備を簡単な操作でバックアップできる高機能を備えているからだ。さらに災害時だけでなく、マスターのシステム障害時のバックアップや、平時の放送素材検証、エリアワンセグシステムとして日常的に利用できることも、放送局のニーズに一致した。この記事では、同製品の機能と特長をまとめた。毎日放送（MBS）の導入事例レポートも掲載した。

（取材・文：渡辺 元・本誌編集部、写真：石曾根理倫ほか）



ミハル通信の「放送局向け緊急バックアップシステム」

キー局・ローカル局で導入に向け準備が進行

ミハル通信の放送局向け緊急バックアップシステムは、震災などで放送局のマスター設備が使用不能になったときに、マスターの代わりになって放送を送出するシステムだ。東日本大震災後、多くの放送局では災害時に対応できる緊急体制と設備の見直しが進められている。このような中でミハル通信の緊急バックアップシステムは、マスターのバックアップシステムとして専用機を導入したい放送局から引き合いが増えている。引き合いがある放送局は、東北の被災3県をはじめ全国のローカル局とキー局だ。すでに毎日放送、テレビ静岡などに導入されているほか、周辺機器も含めたシステム設計を具体的にすすめている放送局が複数ある。キー局数社では、デモンストレーションや導入に向けた具体的な準備を行っている。

それでは、ミハル通信の緊急バックアップシステムの特長を詳しく見ていきたい。

特長1 低コスト・簡単操作で災害時にマスターを代替

放送局は震災などでマスターが使用できなくなった場合、すぐに2つの最優先課題に取り組むことになる。第1はマスターの早期復旧、第2は放送の継続だ。マスターは非常に複雑なシステム構成になっているため全体を理解できる技術者は非常に少ない。その人たちはマスターの復旧作業をしなければならないため、放送の継続に向けた緊急バックアップシステムには、技術に詳しくない人でも扱える簡単な操作性が求められている。

もちろん、すでに放送局は災害などでマスターが使用不能になった場合に備え、緊急バックアップシステムを準備している。これには主に2つのタイプがある。

第1のタイプは、放送局がもともと冗長系として保有している、マスターと同様の予備機を緊急バックアップシステムとして使用するというものだ。しかし、このタイプはマスターと同様にシステムが複雑なため、マスターの技術に詳しくなければ操作